

聖書：士師記13章1～14節

説教：彼は救い始める

はじめに

これからしばらく士師記を見てまいります。士師という聞き慣れない言葉の由来から説明します。これはさばく人、治める人という意味で、中国語訳聖書で使われたのが最初です。明治になって日本語訳聖書をつくる時、中国語訳聖書を参考にしたので、それ以来士師記と呼ぶようになったというのがいささつです。その士師記はいつ頃のことかといえば、イスラエルの民がヨシュアによって約束の地に戻った後の時代、年代で言えば紀元前1200年頃になります。その頃、イスラエルの民は元から住んでいるペリシテ人とたびたび争いが起こり、そのたびごとに、智恵ある者、力ある者、また預言する者がそのときどきに与えられいった。そんな人たちのことを士師と呼びました。今日開いている所は、士師の一人となるサムソンが生まれる前のことを扱っています。彼はどのような事情のなかで誕生していくのか。そのことと私たちの救いとがどのようにつながっていくのか。ともに考えてまいります。

1 イスラエル

1) 主の目に悪であることを

サムソンが生まれようとしていたころのイスラエルのようすが1節にある。「イスラエルの子らは、主の目に悪であることを重ねて行った。そこで主は四十年間、彼らをペリシテ人の手に渡された。」主の目に悪であることというのは、バアルをはじめとする様々の神に仕えて主を捨ててしまったことです。それで主は、ペリシテ人やアンモン人にイスラエルを襲うようにさせたので、とうとうイスラエルはペリシテ人の顔色をうかがいながら暮らさなければならなくなった。それがこのときの背景です。

2) しかし主は

自分で悪いことをした結果苦しむのですから、いまはやりのことばにすれば「自己責任」と言われて終わりでしょう。ところが聖書はそこで終わらない。神は、罪を重ねているイスラエルを見捨てることができません。少し前の箇所になるのですが、10章16節にある。「主はイスラエルの苦痛を見るに忍びなくなられた。」ただかわいそうだと済ますのではなく、実際に行動します。マノアと

その妻に一人の主の使いを送り、神の救いのご計画を明らかにしていきます。

2 マノア夫婦に現れた主の使い

1) 男の子を産む

主の使いは、マノアの妻にこう語ります。3節から5節。「見よ。あなたは不妊で、子を産んだことがない。しかし、あなたは身ごもって男の子を産む。今後あなたは気をつけよ。ぶどう酒や強い酒を飲んでではない。汚れた物をいっさい食べてはならない。見よ。あなたは身ごもって男の子を産む。その子の頭にかみそりを当ててはならない。その子は胎内にいるときから、神に献げられたナジル人だから。彼はイスラエルをペリシテ人の手から救い始める。」

主の使いが伝えたことは、三つあります。まず一つ目。主の使いがやってきて、あなたは男の子を産むと告げられる話で最も有名なのは、イエスの母マリアでしょう。サムソンの場合も、主の使いが現れ、マノアの妻に告げていく。これは単なる偶然なのか。そのことはまた後で考えます。

2) ナジル人

二つ目は、それで気をつけるべきこととして、ぶどう酒を飲むことも汚れ物を食べることも、そして頭にかみそりを当てることもいけない。というのは、その子はナジル人であるから。ナジル人とは何者なのか。ナジル人と聞くと、日本人とかアメリカ人というように、ナジル人（じん）という人種がいるのかと誤解されがちですが違います。

「ナジル」と呼ばれる特別な誓いをしている人のことをナジル人と呼び、そのことについては民数記6章に書かれています。特別な誓いを立てる場合、ここで御使いが語っているような方法をとるよう指示されています。サムソンは、母の胎にいたときからナジル人の誓いのもとにある特別な存在として産まれるというのです。

3) イスラエルを救い始める

そして三つ目。5節の最後、「彼はイスラエル人をペリシテ人の手から救い始める。」これを読んでどう思いますか。「彼はイスラエルをペリシテ人の手から救う」ならわかりますが、なんだかま

わりくどい印象です。どうしてこんな書き方をするのか。このことも後で取り上げます。

3 イエス・キリスト

1) 決してぶどうの実からできたものを食べない
さて夫のマノアは、妻から主の使いのことを聞かされるわけですが、にわかには信じられません。疑うマノアは主の使いに、「その子のための定めとならわしはどのようなものでしょうか」と尋ねます。そうすると主の使いはこう答える。14節前半。「ぶどうからできる物はいっさい食べてはならない。ぶどう酒や、強い酒も飲んでではない。」

ここのところ、よく注意して読んでください。主の使いは、妻に対してこう語っていました。4節です。「ぶどう酒や強い酒を飲んでではない。」7節を見ても、妻は主の使いが語ったとおりに聞いていたことがわかる。では、4節と14節を比べてみてください。4節にはなかったのに、14節で新たに付け加えられたことばがあります。「ぶどうからできる物はいっさい食べてはならない。」なぜ付け加えられたのでしょうか。民数記6章4節に「ぶどうの木から生じるものはすべて、種も皮も食べてはならない」とあります。主の使いは、ナジル人の誓いを立てる者が守らなければならないことを強調し、これが大切だということで付け加えた。でもなぜわざわざそんなことをするのでしょうか。

話は変わるようですが、この後、私たちは聖餐式に臨みますが、そこでいつも読んでいる聖書の箇所にもこうあります。マタイの福音書26章29節。「わたしはあなたがたに言います。今から後、わたしの父の御国でああなたがたと新しく飲むその日まで、わたしがぶどうの実からできた物を飲むことは決してありません。」すでに説明しておわりのとおり、これはナジル人の誓いです。弟子たちと最期の食事をとられ、これから十字架に向かうというタイミングで、ナジル人の誓いをしていたのです。サムソンもイエスも、ナジル人の誓いをしていたのは、単なる偶然でしょうか。しかし聖書では、この二人の他にナジル人の誓いをしたのは、明らかにわかるものとしては洗礼者ヨハネしかいないのです。それだけではない。最初にも言いましたが、マノアの妻もマリアも主の使いから「男の子を産む」と告げられました。こうなるともはや偶然ではなく、サムソンとイエス・キリストがつながっていると考えるのが自然です。

2) 救いの始め、救いの完成

サムソンがどのようにしてイスラエルを救ったのか16章に詳しく書かれています。サムソンは、ペリシテ人の手に捕らえられてしまうのですが、柱をへし折って建物を崩壊させ、自分のいのちを投げ打って敵を倒し、イスラエルをペリシテ人の手から救います。

もちろんサムソンの救いは完全なものではない。あくまでも救いの始まりです。性格も乱暴者で女好きで、彼が行くところでは必ず騒ぎが起き、これが本当に神が選んだ人なのかと首をひねりたくなるくらいです。いっぽうの、やがて来られるイエス・キリストは私たちの前でへりくだり、十字架において救いのみわざを完全に成し遂げてくださいました。二人はまったく対照的です。それでも神はサムソンを選び、彼を通して救いが始まっていくと語るのです。

このことから二つのことが言えると思います。一つ目は、サムソンのよう常識はずれで手のつけられないような乱暴者でも、神は救いのために用いられるというのならば、私たちは誰でも神の救いのご計画のために用いられていく。私はだめとか、信仰が弱いからという必要はない。むしろだれもが救いのために用いられる可能性がある。

二つ目に言えること。イスラエルが自分の罪で苦しんでいたとき、神はなんとかしなければと思われ、乱暴者のサムソンを起こし、それもナジル人の誓いをもって、救うことを確かに約束されました。

ということはこうなります。もしいま目の前に大きな壁が立ち塞がり、たとえ光が見えないような絶望の淵にあっても、失望しなくてよい。あきらめなくてよい。私たちはどんなときでも、どんなところにおかれても救いを信じて待つことができる。誰も自分たちを救うことができないと絶望していたときに、サムソンを与えて救ってくださった神です。であれば、神のひとり子主イエス・キリストの救いはどれほどすばらしいものであるか。キリストはナジル人の誓いをもって、私たちを必ず天の御国へと招くのだと約束されました。

そのことを信じて主の救いを待ち望んでまいります。